

クラミジア

Chlamydia

猫ではクラミジアにより比較的軽度な持続性上部気道感染症が起こります。この病気は伝染性で、特に多数の猫を飼育している家庭や仔猫に多く見られます。潜伏期は3~10日程度と考えられています。

原因

*Chlamydia.psittaci*とよばれる細菌の猫株の感染が原因です。感染はこの菌をもつ猫の分泌物からの直接感染や接触感染、飛まつ感染により起こります。また、特に妊娠母猫から新生猫への感染には注意が必要です。

症状

流涙、クシャミ、鼻水、結膜炎、結膜浮腫などが主な症状です。特に初期の段階では片方だけの結膜炎、クシャミなどが特徴的な症状です。発熱はみられることも見られないこともあります。以前は猫クラミジア肺炎ともよばれていましたが、単独で肺炎を起こすことは稀です。



診断法

通常は症状などから推定診断して治療を行います。確定診断するためには結膜の細胞を取り、特殊な染色液で染色して特徴的な所見を顕微鏡で探します。

治療法

通常、抗生物質の点眼や眼軟膏による投与、経口

投与などを行います。この菌単独で、入院や点滴が必要になるような重篤な症状を起こすことは稀です。ただし、他の呼吸器系の病気や、猫免疫不全症候群（猫エイズ）、猫白血病（FeLV）などと混合感染している場合には注意が必要です。

自宅での看護法

獣医師から処方された薬はきちんと投与すること。体力を落とさないように高栄養な食餌を与えること。また、猫を多数飼育している場合には伝染性のある病気なので、他の猫から隔離することを心掛けて下さい。

飼育環境は次塩素酸ソーダ、消毒用アルコール、逆性せっけんなどで消毒するといいでしょう。

予防法

日本では猫5種混合ワクチン（Fel-O-Vax5）により予防できます。

多頭飼育する場合には十分な環境スペースを確保し、換気を行うこと。飼育環境の清掃、消毒などを行うことはいくらか効果があるでしょう。

また、猫ウイルス性鼻気管炎や猫カリシウイルス感染症との混合感染は症状を重篤にする可能性があります。これらの病気はワクチンにより予防できませんので確実にすること、猫白血病の汚染地域で感染確立が高いことが予想されるのであればこちらも予防注射を接種することで仮にクラミジア感染が起こった場合に症状を悪化させることを回避できます。

メモ

この病気は猫ウイルス性鼻気管炎や猫カリシウイルス感染症と症状だけで区別することが難しいことがあります。また、一旦回復しても様々なストレスが加わると再発することがあります。

以前、人への感染の報告があるようですが、現在では猫クラミジアが人への感染の機会があることは希だとされています。